

1900年前後における剣術の体操化過程にみる胴技の変容： 小沢卯之助らの武術体操法に着目して

矢野 裕介

Yusuke Yano: Transformation of the *do-waza* with reference to the shift in *kenjutsu* to a group exercise around 1900: Focus on the *bujutsu-taisoho* of Unosuke Ozawa and others. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 59: 625-637, December, 2014

Abstract : This study examines the transformation of the *do-waza* (techniques for striking the opponent's torso) in *kenjutsu* motivated by a philosophy of physical education rooted in medical rationalism. This transformation was initiated with the goal of fostering balanced physical development. The study materials were *do-waza*-related descriptions in representative *kenjutsu* manuals published around 1900, and handed down from person to person. Through examination of *do-waza* in modern Japan, it was concluded that *bujutsu-taisoho* (martial art exercises) were introduced and endorsed by Unosuke Ozawa, Kenzo Nakajima, Tokuichiro Nakano, and others in their attempt to incorporate *kenjutsu* teaching materials into regular physical education in schools. This was the point when standard *kenjutsu* instruction techniques shifted from one-to-one to group-exercise instructions.

Results obtained in this study can be summarized as follows:

1. The core contents of *do-waza* in representative *kenjutsu* textbooks published between 1884 and 1897 only describe methods for striking the *migi-do* (right *do* or right torso) but not the *hidari-do* (left *do*). Shingoro Negishi (1884) states that it is better to strike the *migi-do* in preference to the *hidari-do*, while Daijo Kameyama (1895) and Minoru Yoneoka (1897) state that only *migi-do* strikes are rationally acceptable from a technical perspective, whereas *hidari-do* strikes are strictly unacceptable.

2. Between the late 1890s and 1900s, Unosuke Ozawa, Kenzo Nakajima, and Tokuichiro Nakano developed the *bujutsu-taisoho* with the aim of implementing *bujutsu* (martial arts, i.e., *kenjutsu*) as part of the regular school curriculum. This became a key opportunity to shift *kenjutsu* instruction from one-on-one to group instruction. Simultaneously, the training came to present *do-waza* methods for striking both the *migi-do* and the *hidari-do* (Ozawa, 1897; Shizuoka Prefecture Teacher's School, 1902; Nakayama and Nakano, 1906).

3. The *do-waza* in the *bujutsu-taisoho* as proposed by Ozawa, Nakajima, and Nakano effectively gave *hidari-do* strikes, which had been previously rejected in the field of *kenjutsu*, equal standing with *migi-do* strikes, with the aim of achieving balanced physical development on both sides of the body. The motivation for this revised *do-waza* was a physical education philosophy founded upon principles of medical rationalism.

Key words : medical rationalism, kendo, technique, history

キーワード : 医学的合理主義, 剣道, 技術, 歴史

1. 問題の所在

剣道の技の体系には、「弘化・嘉永年間（一八

四四～五四）に千葉周作によって完成された『剣術六十八手』という打突部位別〔面，突，小手，胴——引用者注〕の体系があり，それは，聖徳太子流・原耕作の『撃剣之極意』（鈴木龍夫，一九

○五年)や東京高等師範学校・高野佐三郎の『手法五十種』(『剣道』剣道発行所, 一九一五年)に受け継がれ」(中村, 2007, p. 325)ていった。

しかし, 1911年の中学校令施行規則の一部改正により, 「撃剣及柔術ヲ加フルコトヲ得」(大蔵省印刷局編, 1911a)と, 剣道が中学校の正課教材として取り扱ってもよいことが本邦ではじめて認められたのを機に, 同年11月6日より5週間にわたって東京高等師範学校を会場に現職武術講師を対象として開催された文部省主催の講習会では(大蔵省印刷局編, 1911b), 千葉周作の「剣術六十八手」によって体系づけられた「打突部位別の技の体系は採用されず, 『団体教授法』と名付けられた『相手との対応の仕方』による技の体系化が試みられ」(中村, 2007, p. 325), その伝達が始まることとなった。そして現在でも, 「基本的にはこの〔団体教授法で示された——引用者注〕『相手との対応の仕方』による技の体系が踏襲」(中村, 2007, p. 326)されているのである。

このように俯瞰すると, 団体教授法で示された技の体系は, 1911年以降の近現代剣道の中核をなす技の体系であったと見做すことができるが, 中村(1981)によれば, その団体教授法は武術体操法の成果を集約したものであったとされている。

ここでいう武術体操法とは, 文部省(1883)が武術, すなわち「剣術柔術ノ体育上ニ於ル利害」に関する調査を体操伝習所に委ねた際に, 「学校体育法を, 主として生理学や解剖学や衛生学の立場から規定しようとした伝習所の責任者たちの体育観〔=医学的合理主義——引用者注〕」(今村, 1951)からみて, その指導法は1対1が基本とされていたために, 「一級全体一斉に授けがたし」(高野, 1915, p. 290)ことや, 身体の発育に平等均一性を欠くなどといった理由から, 国民教育のための教材としては不向きなことが指摘され, 学校体育の正課教材として採用しない方針が明示された折^{注1)}, 文部省をはじめとした医学陣に, 武術の体操化によってその正当性を確保し, この局面を打破しようと案出されたものである(岸

野・竹之下, 1983)。

この武術体操法を「最初に考案し, 全国的にひろめたのは小沢卯之助」(中村, 1994, p. 181)である。東京市牛込愛日小学校校長, 麻布小学校校長, 三河台小学校校長等を歴任した(大場, 1982)小沢卯之助(以下「小沢」と略す)は, 1897年の『武術体操法』において, 「当時の学校体育の主要な教材であった『普通体操』の『一斉指導方式』を取り入れ」(石井, 1987)た刀体操を案出している。また, 小沢と同じ立場(=教育者)で武術の体操化を推し進めた人物として, 中島賢三(以下「中島」と略す)と中野篤一郎(以下「中野」と略す)をあげることができる。岸野・竹之下(1983)によれば, 中島は『木剣体操』『長刀体操』を創案し, 『当時静岡師範をして全国的に大なる存在たらしめ』大くの共鳴者を獲得した」とされ, また兵庫県の鮎原小学校訓導の中野は, 「個人的に偏した武芸鍛錬法を修正し, 完全な体操法としての『武術体操』を発表した」とされているからである。

ともあれ, 小沢らが考案した武術体操法は, それまで「武術の指導法は1対1でしかできないものと考えていた多くの武術家に対し, 体操式の一斉指導法が可能であることを詳細に明示」(中村, 1994, p. 185)することとなった。しかし小沢らの武術体操法に着目した従前の史的研究では(中村, 1978, 1980, 1987, 1994), 剣術の指導法が1対1の個別指導から体操式の一斉指導へと転化されていくなかで, その技の内容がどのようにして医学的合理主義に立脚した体育観に基づくもの, すなわち身体の平等的発育を促すものへと改変されたのかについては詳らかにされていない。

そこでこのことを実証するためには, 武術体操法が登場する以前の近代日本において, 1対1で伝承されていた剣術の技の内容を当該期の代表的な剣術書を通して分析し, それが1890年代後半から1900年代にかけて, 学校体育に剣術を正課教材として採用させることを念頭に置いて試みられた, 小沢, 中島, 中野らの教育者による武術体操法ではどのように改められ, 体系づけられていったのかを検討する必要がある。なかでも本研究

では、小沢らの武術体操法が登場したことによってその内容に大きな変化がみられる胴の基本的な打ち方（以下「胴技」と称す）について焦点を定め、体操伝習所の掲げる体育観（＝医学的合理主義）がどのように反映されていったのかについて、運動技術史的な視点から考察していくこととした^{注2)}。

2. 武術体操法登場以前の剣術書における胴技

明治に入ると、「活版印刷が普及し多くの剣道書が刊行されたが、管見するところ、活版剣道書刊行の嚆矢は神道無念流の根岸信五郎著『撃剣指南』（明治十七年）」（湯浅，2002）である。本書は、根岸信五郎（以下「根岸」と略す）が「神田有信館でいち早く子弟の教育に当たっていたころの著作」（渡辺編，1971）である。根岸（1884）の『撃剣指南』では、「三尺八寸ヲ定法トス」（根岸，1884，p. 20）る竹刀の把持法が、柄「頭ヲ左手ニ取り小指ヲ輕ク握リ締メ其他ノ四指ハカヲ用ヒス恰モ鶏卵ヲ握ルノ状ヲ為シ右手ハ鏝元ニ置キ拇指ヲ以テ食指ヲ覆ヒカヲ偏用セス」（根岸，1884，p. 6）と解説された上で、胴技における基本的要素が次のように説明されている。

敵手ノ胴ヲ切り払フニ左右何レカ是ナルト言ハム右胴ヲ払フヲ良トス其右胴ヲ撃ツニハ左手ヲ右手ニ添ヘ右拳ノ甲ヲ上ニシ左拳ハ五指ヲ上ニシテ撃込ミ敵手ノ胴ニ達スルトキ両手ヲ交叉シ左足ヲ前ヘ出スヘシ（根岸，1884，p. 14）

つまるところ、根岸が説く胴技は、左右のうち右胴を打つことを可とし、その際の足の運び方（＝「足さばき」）は、左足の前方への踏み出しによって行うことを求めたものであった。

このような、左右の胴のうち右の胴を打つことを良いとする記述は、井ノ口松之助（1887）によってまとめられた『柔術剣棒図解秘訣』や、横野鎮次（1894）が著した『秘訣図解柔術撃剣独習法』でも確認することができる。それぞれの胴

技は、「胴ハ相手ノ右ノ方ヲ打ツベシ」、「胴は右胴ヘ打込むを正当となす」と説明されており、その打ち方の一例が図入りで示されているのである（図1参照）。

同様の記述は、市川宜堅（1895，以下「市川」と略す）によって著された『剣法独案内』でも確認できる。市川は「打込法」について、「凡ソ撃剣ヲ練習スルニ其打ツベキ処自ラ規則アリ其規則ノ処ノ外ヲ打テハ勝敗ヲ取ラザルモノ」（市川，1895，p. 8）とし、図（図2参照）を用いて「面即頭上横面即耳左右上側面真向ヨリ少シ左右小手即右腕胴右脇腹突臆其脛オアシト云左胴オハラト云フ胴突腹部ヲツク事」（市川，1895，pp. 8-9）として打突部位を示すとともに、「此脛以下胴突



図1 「右胴ヲ打ち勝占メタリ」ところ
（井ノ口，1887，p. 94.）



図2 「撃剣ヲ練習スルニ其打ツベキ処」
（市川，1895，p. 8.）

等ハ止ムヲ得ザル場合ノ外ハ施シ得ズ」(市川, 1895, p. 9) と解説しているのである。その理由は、「大戦混闘ノ場合ニハ到底施シ得ザル」ためであり、「故ニ其流儀ノ外ハ練習セザルモ宜シ」(市川, 1895, p. 9) いものであると断じている。

そのため、「胴ノ打方」(市川, 1895, p. 17) において(図3参照), 右胴打ちのみを掲げている因には理由があったといわねばならない。その方法は、「三尺八寸位」の「太刀」(市川, 1895, p. 6) を「通常右手ヲ先ニシコレヲ柔カニ握リ鐐ヨリ二寸計り去り持ツベシ左手ハ太刀ノ柄頭ヲ掌中ニ入レ小指ト無名指トノ間ニ当テ強ク握」(市川, 1895, p. 7) り、「吾ガ身体ヲ少シ屈シ(上部ハ依然トシテ脚部ヲ屈ス)左足ヲ先ニスルヲ常ト」し、「成ルベク肋骨ヨリ腹部ニ掛ケ斜ニ切ルノ心組ニ打ツ」(市川, 1895, p. 19) ものであった。

但し同書では、「場合ニヨリ右足ヲ出スコトアルモ妨ナシ」(市川, 1895, p. 19) と、右胴を打つ場合に、例外的に右足からの踏み出しによる「足さばき」で行うこともありうるとしている。また同書では胴技を繰り出す機会についても言及されており、相手の胴を「最初ヨリ打込ム事困難」であるが故、「敵ノ打ち来ル太刀ヲ受ケテ後施スヲ通常トス」(市川, 1895, p. 17) るが、「欺シ打トテ最初面ヲ打ツノ所ヲナシテ敵ノ太刀上辺ニ上ルヲ見テ胴ヲ打ツノ手段」(市川, 1895, pp. 17-18) もあると解説されている。つまり、胴を打つ場合に、面を攻めながら右胴打ちに変化するといった、「しかけ技」的な内容が提示されているのである。ともあれ、同書における胴技は右胴を打つもので、左胴については例外的に打つ場合もあるとしながらも、その具体的な方法を提示するまでにはいっていない。

一方、時期を同じくして刊行された亀山大城(1895, 以下「亀山」と略す)の『撃剣ト柔術図解』では、「胴打」は「敵の前の明きたるを打つ」ものとして解説されているが、そこでは左胴を打つこと、すなわち「逆胴は術法にては決して許さざる」ものと附言している。そればかりか、「逆胴」の図(図4参照)を掲載し、「近世此手を編



図3 「胴ノ打方」
(市川, 1895, p. 18.)



図4 「逆胴」
(亀山, 1895, p. 32.)

み出し専ら此手段を用ゆ予は常に之を慨歎する所なり」と、それに対して強く批判しているのである。同書では右胴を打つ具体的な方法は解説されていないが、上述したことを勘考すると、亀山は左右胴のうち右胴を打つことのみが術理に適うものと捉えていたといえる。

つづいて、米岡稔(1897, 以下「米岡」と略す)によって『撃剣柔術指南』が書き著された。同書では、「三尺八寸位」の竹刀を「普通右手を先にして之を柔かに握り鐐より二寸ほど先きを持ち左手は竹刀の柄頭を掌中に入れ小指と無名指との間に取テ強ク握る」(米岡, 1897, p. 11) 方法が提示された上で、胴技の繰り出し方が、次のように説明されている。

胴打方も亦た延腕法にてするを善しとす決して
屈腕法にて胴を打たるべきものにはあらず故に
胴の打方は成るべく手を延して鮮かに敵の胴を
打つべきを要す而して其これが打方は彼の面小
手を打込むと稍異なりて最初より敵の胴を打込
むことは甚だ困難なり故に敵の打ち来る竹刀を
受けて後ち我れより施すを定法とす然れとも打
とて最初面を打つ体裁をなして敵の竹刀上辺に
揚るを見て胴を打つ手段あり…胴の打方は其
場合に依りて種々あれども我身体を少し屈め左
足を先にするを常とす其場合により右足を前に
出すことあるも苦しからず成るべくは肋骨より
腹部に掛け斜めに切るの心組に打つを宜しとす
(米岡, 1897, pp. 42-43)



図5 「胴打方」
(米岡, 1897, p. 42.)

上記の引用文から明らかなように、同書では、
前出した剣術書と同じく、左胴右胴のうち右胴を
打つように解説されている。なお、その際の「足
さばき」は「左足を先にするを常とす」としてい
るが、「場合により右足を前に出すことあるも苦
しからず」(米岡, 1897, p. 43)と記されている
ように、市川(1895)の『剣法独案内』と同様、
例外的に右足を前にして行う右胴打ちも提示さ
れている。このことから、1895年以降、例外的で
はあるが右足からの踏み込みによる右胴打ちが認
められるようになってきたことが窺える。一方、
左胴については、「近年逆胴を打つ事を往々世間
に流行すれども此の如きは真実の法にあらず」と
記されているように、亀山(1895)の『撃剣ト
柔術図解』と同じく、当時の逆胴(左胴)の流行
に対する批判がなされており、図5のように、
相手の右胴を捉える方法が「真実なる胴打方」
(米岡, 1897, p. 43)であると説いている。

以上のように、1884年から1897年までにおけ
る代表的な剣術書にみる胴技の内容は、左胴右胴
のうち右胴を打つように解説されていたといえ
る。根岸(1884)の『撃剣指南』では左右胴の
うち右胴を打つ方が良いとしていたことや、亀山
(1895)の『撃剣ト柔術図解』や米岡(1897)の
『撃剣柔術指南』にいたっては、右胴打ちのみが
術理に適うものとし、左胴を打つことは断じて許

していない。このように右胴に拘るのは、市川
(1895)の『剣法独案内』や米岡(1897)の『撃
剣柔術指南』において、その打ち方がそれぞれ
「肋骨ヨリ腹部ニ掛け斜ニ切る」(市川, 1895, p.
19), 「肋骨より腹部に掛け斜めに切る」(米岡,
1897, p. 43)と説明されていたように、武術と
しての急所、すなわち「肝臓(上記の説明は胴部
でも、急所の肝臓を切ることには拘っている)」だ
けが打突部位と考えられていたことによる。当該
部位を打つ際に、わざわざ左足を前に出すのも、
腰の回転で肝臓を切るという武術性が強調されて
いる証拠であるからである。

3. 武術体操法における胴技

3-1. 『武術体操法』(小沢卯之助著, 1897年) にみる胴技

近代学校教育制度が発足した1872年以来、武
術を学校体育の正課教材へと採用させようとする
在野の武術家達の運動は根強く続けられていた
(中村, 1976)。しかし、冒頭で述べたように、
当時の文部省の学校体育に関する方針は徹底した
医学的合理主義に立脚した体育観が反映されてい
たため、武術はあくまでも課外遊戯の一部である
という態度が堅持されていたのである。また、時
期を同じくして「しだいに強くなってきた武道正
課案は否決され、武道はあくまでも課外運動とし
て奨励されたに留まったため、武術の体操化が方

法的に具体化」(石井・阿部, 1984) されるようになった。従って、「武術の体操化は、あくまでも伝統的な精神を拠所としながらおこなわれ、『体操化』の名のもとに正当性を確保しようとした」(石井・阿部, 1984) のである。

この武術の体操化の試みは、1895、1896年頃から始められ、なかでも小沢がその主導的役割を担っていたとされている。大場(1982)によれば、小沢は、1865年6月20日、神奈川県中郡吾妻村に生まれた。長じて、1884年7月、東京府師範学校を卒業し、同年9月に芝区鵜絵小学校訓導となり、転じて福島県伊達郡原小学校校長、神奈川県横須賀小学校校長、東京市牛込愛日小学校校長、麻布小学校校長、三河台小学校校長を歴任した。小沢は、学校長として学校経営にあたる時、体操を重視し、教具・遊具の創意工夫に努め、そのなかには、「姿勢矯正器、下肢助長木馬遊具、改良木剣のように専売特許のもの」もあった。体操では、「特に師範学校在学中から研究につとめた薙刀体操、剣術体操の普及発展に努力し、初等教育界は勿論のこと、体育界でも注目すべき存在であった」という。

ところで、小沢は東京府師範学校在学中から武術の体操化に関する研究を進める一方で、「夫レ小学校ニ於テ児童ニ課スル体操ハ体育法ノ一半ナルヲ知ラズ体操ハ即チ体育ニシテ体育ハ即チ体操ナリト心得体操ヲ課スレバ即チ体育ノ能事ヲハレリトシ彼ノ精神ノ疲労ヲ回復スベキ放課時間ノ如キ教師ハ運動ヲ奨励セズ」(小沢, 1896a, pp. 44-45) といった学校体育の現場の状況を目の当たりにしてきたことで、「体操法中ノ普通体操法ヲ以テ普通教育ト一般国民トノ兩者ノ体育ニ補益アル最大良法ナリト信」(小沢, 1896a, pp. 63-64) ずるが由に、国民体育という見地から、硬直化してしまった普通体操を改良する必要があることを痛感していた(中村, 1976)。そのため小沢は、「今普通教育ニ武術体操ヲ応用セバ完全ナル第二ノ国民ヲ養成スル点ニ於テ大益アルノミナラズ実用ニ益シ社会ヲ利スルヤ大ナリ政ニ吾人ハ改良普通体操ト共ニ普ク世ノ大中小学及ビ各種学校ニ行ハレ且ツ一般国民ガ之ヲ励行センコト

ヲ切望」(小沢, 1896a, p. 138) し、「普通体操中ニ一大良法ヲ加ヘン」(小沢, 1896a, p. 74) と、武術体操を正課教材に組み入れようとしたのであった。

この考えに基づき、実際の方法論をまとめたものが、1897年に刊行された『武術体操法』である。本書における武術体操は、「棒術、剣術、薙刀術、槍術等本邦固有武道各流派ノ法式中体育方法トシテ適当ナルモノヲ拔萃シ且ツ歩兵操典、騎兵操典、体操教範、剣術教範、舶刀操法、舶槍操法、陸軍礼式、普通礼法、普通体操法等ノ諸書ヲ参酌シ之レヲ体操ニ同化」(小沢, 1897, 緒言 p. 1) したもので、「体操準備」、「予備体操」、「棒体操」、「刀体操」、「薙刀体操」、「槍体操」の6つが創案されている(小沢, 1897, 目次 pp. 10-12)。とりわけ、本研究で取り上げる刀体操に対する小沢の考えは、次のようなものであった。

吾人の見る所によれば、今日の撃剣教授法を以てしては、仮令之れを正科に加ふる事と為すも、時間の不足するを免かれず。是れ実施上に生ずる教授上の障害なり。又一人を教授する傍ら、若しくは数组をして練習せしむる傍ら、他の衆生徒を監督するは困難なる可し。是れ実施上に生ずる管理上の障害なり。此等の障害を除却せずんば、撃剣を以て体徳二育に無害有益の最良法なりとするも、学校生徒に正科として之れを課し、必須科として之れを授けんとするは、至難の業と云はざるを得ず。是に於いて乎、撃剣の個人的教授を廃して、学級的教授を為すの必要を感じ可し。故に先づ学級的教授法を案出し、次ぎに撃剣多少の改良を加へて、体育の本旨に適せしむるの講究を為すを要す。若し果して、学級的教授法を案出し、且つ体育の本旨に適合せしむるを得ば、必ずや現行普通体操に幾倍するの利益あるや疑ふ可からざるを以て、痴人を除くの外、之れを学校の正科に加ふるの議に反対する者無かる可し。(小沢, 1896b)

つまり、小沢(1896b)は従前の剣術における

1対1の「個人的教授」を撤廃し、1対複数の「学級的教授法」へ、すなわち剣術の一斉指導法を案出することにしたのである。そして、一斉指導法と「多少の改良を加へて、体育の本旨に適せしむる」剣術を用いれば、「必ずや現行普通体操に幾倍するの利益ある」と考えたのである。換言すれば、「学校の正科に加ふるの議に反対する者無かる可し」と述べているように、これらは体操伝習所の答申で指摘された課題点を克服し、学校体育の正課教材に剣術を採用させるための対応策とみてとれよう。

それでは、小沢はどのように「多少の改良を加へて、体育の本旨に適せしむる」(小沢, 1896b) 剣術を創生したのであろうか。ここでは、小沢が考案した刀体操のなかでも、特に胴技の内容を中心にみていきたい。

小沢(1897)の『武術体操法』に掲げられる刀体操は、個人的に行う「第一刀体操」(二十節)、「第二刀体操」(二十節)、これらの体操で習得した技術を基にし、対人で行う「刀ノ攻守演習」(二十節)、そして「居合抜体操」(十二節)の計4部より構成されている。何れの体操も、「体操用ノ刀」、すなわち「木剣若シクハ木剣ノ形状ヲ備ヘタル竹製ノ刀ヲ短キ鞘ニ納メタル者」(小沢, 1897, p. 119)を「右手ニ鐔元(但シ鐔元ナリトテ拇指及ビ食指ヲ鐔ニ附着セズ縁ノ金子際)ヲ握リ左手ニテ柄頭ヲ握」(小沢, 1897, p. 122)りながら行われるものである。とりわけ胴技については第二刀体操の「第十六節 上(中)段ヨリ隅飛膝姿左右胴ヲ斬ル 四挙動」(小沢, 1897, p. 167)において、以下のように取り上げられている。

- (一) 右隅飛左膝姿ヲ為スト同時ニ敵ノ左胴ヲ斬リ尚ホ続イテ刀尖ヲ廻ハシテ左面上ニ至ラシメ両手ヲ右面上ニ上ゲ面ヲ拒グ
- (二) 隅飛戻リヲ為スト同時ニ上(中)段ニ取ル
- (三) 左隅飛右膝姿ヲ為スト同時ニ敵ノ右胴ヲ斬リ尚ホ続イテ廻ハシ刀尖ヲ右面上ニ至ラシメ両手ヲ左面上ニ挙ゲ面ヲ拒グ〔図6参照——引用者注〕

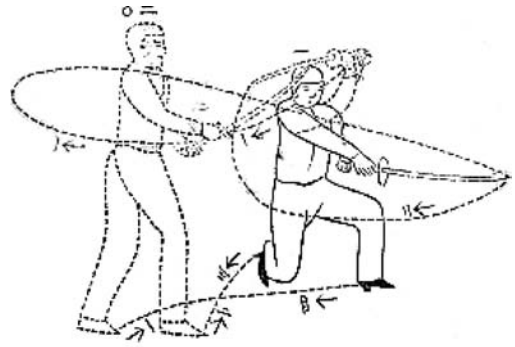


図6 「左隅飛右膝姿ヲ為スト同時ニ敵ノ右胴ヲ斬リ尚ホ続イテ廻ハシ刀尖ヲ右面上ニ至ラシメ両手ヲ左面上ニ挙ゲ面ヲ拒グ」
(小沢, 1897, p. 168.)

- (四) 隅飛換戻リヲ為スト同時ニ上(中)段ニ取ル此ノ如クシテ二回行フ… (小沢, 1897, pp. 167-168)

ここでは、「右隅飛左膝姿ヲ為スト同時ニ敵ノ左胴ヲ斬」る方法と、「左隅飛右膝姿ヲ為スト同時ニ敵ノ右胴ヲ斬」(小沢, 1897, p. 167)る方法が説明されているように、相手の右胴と左胴を打つように指示されているのである。またその際の「足さばき」は、右胴を打つ場合は左膝姿で行うので左足を前にして、左胴を打つ場合は右膝姿で行うので右足を前に出す方法が説明されていた。

このように、小沢(1897)の『武術体操法』に掲げられる刀体操では、従前の剣術書において「術法にては決して許さざる」(亀山, 1895)もの、「真実の法にあらず」(米岡, 1897, p. 43)と説明されていた左胴打ちを、右胴打ちと同等に位置づけ練習する方法が提示されていたが、そこには「身体各部平等ノ発達ト練習トヲ期セシガ為メニ右ニテ演習セシムル者ハ必ズ左ニテ演習セシメ」(小沢, 1897, 緒言 p. 3)なければならない、といった小沢の考え方が反映されていたのである。

従って、小沢のいう「体育の本旨に適せしむる」(小沢, 1896b) 剣術とは、胴技に限ってみれば、それまでの剣術書では否定的に捉えられていた左胴打ちを練習内容に組み入れることで、身体における左右の均整なる発育を狙った練習方法、すな

わち医学的合理主義に立脚した体育観に基づく練習方法を提唱するものであったといえる。

3-2. 『木剣体操法』（静岡県師範学校（中島賢三編述），1902年）にみる胴技

小沢と同じ立場において武術の体操化を推し進めた人物として、中島があげられよう。中島は、1868年11月28日静岡市鷹匠町に生まれ、1889年4月2日、静岡県尋常師範学校を卒業、県下の小学校訓導をした後、1892年4月より静岡県師範学校附属小学校に勤務し（飯塚編，1974），「明治二十九年中より静岡県師範学校附属小学校高等科第三第四学年男児に」（中島，1914，p. 5）木剣体操を指導していた。この木剣体操が世間に初めて発表されたのは、「明治三十三年静岡県周智郡教育会展覧会に木剣並に木剣体操法を出陳した時」（中島，1918，p. 6）であるとされ、1902年には「香川県主催の関西教育品共進会開会に際し、静岡県師範学校に於て拙案木剣体操法を印刷出版し、併せて全国師範学校に贈呈」（中島，1918，p. 7）したとされている。その後も中島は木剣体操を研究し続け、1902年に上梓した『木剣体操法』を、1906年、1909年、1914年の3度にわたって加除補正し、1918年にはその集大成として『木剣及長刀体操法』を著している。

さて中島は、1909年に再刊した『木剣体操法』の「緒言」において、以下に掲げる5つの「要素を具する運動法にしてこれを授くるにも一生不可廃ものといふ考を以て運動の習慣を養ふことにつとめたらんには学校の体操も始めて国民体育の一法としてほこることを得る」と主張しており、「此の考案の下に数年間これ〔＝木剣体操——引用者注〕を已の在職せる静岡県師範学校附属小学校高等科男生徒に課し漸次改善を加へ来つたのであるが去明治三十五年師範学校に於て其の効果を認められ之〔＝『木剣体操法』——引用者注〕を上梓し」（中島，1909，緒言 p. 2）と述べている。

- （一）自発的に行ふ程の興味あるもの一意味をもてる運動にして品性陶冶の目的を達し得べきもの——（教育的）

- （二）身体各部の筋骨を十分に發育せしめこれを強健にし内部の諸機能を旺盛ならしむべきもの（生理的）
 （三）国民の気風に適し元気をさかんならしむべきもの（歴史的）
 （四）用具簡単にして動作も容易なるもの（簡易的）
 （五）短時間に十分の運動となるべきもの（経済的）（中島，1909，緒言 p. 2）

加えて同書では、木剣体操の目的と本質について、以下のように説明している。

一には身体の均齊的發育を促しこれを強健敏捷にし我国固有の武技の一端を知らしめ一には精神を鍛練して剛勇，沈着，羞恥，礼敬等の諸徳を修養し運動に対する興味を喚起して終生木剣の素振を行ふの習慣を得しめんとするにある…木剣体操は我が国の特技たる剣術の形及試合に於ての剣の操作と体の動作とを基本としてこれを分解し結合し又は補足して編成したのである。これを組立てに当つては生理上教育上武芸上の各方面に向て考慮を費したるはいふまでもない…（中島，1909，p. 5）

上記2つの引用文から、中島による木剣体操も、先に取り上げた小沢の武術体操法（＝刀体操）と同じく、医学的合理主義に基づく観点から剣術の体操化を試みたものであったと捉えることができる。更に中島は、後年、木剣体操を「（生理的考慮）＋（剣道）＋（団隊的教法）」（中島，1918，巻中附録図）であると定義している。従って、中島も小沢と同様に、剣術を学校体育の正課教材に組み入れるためには、剣術の一斉指導法の採用を不可欠としていたことがわかる。

それでは、このような考えの下に組み立てられた中島の「木剣体操」における胴技は、どのような内容が提示されていたのであろうか。

1902年に刊行された静岡県師範学校著『木剣体操法』の内容は、中島賢三の「編述」（静岡県師範学校，1902，緒言 p. 2）によるものである。

同書で取り上げられている木剣体操は、「桎の木にて作つた鏝なしの木剣」（静岡県師範学校，1902，要旨 p. 1）を，例えば「精眼の構」のように，右手で「柄を」（静岡県師範学校，1902，p. 6），左手で「柄頭を握」（静岡県師範学校，1902，p. 7）りながら，素振りを主体とした「第一部」の技（三十五節）と，これら「第一部の運動を，結合した」（静岡県師範学校，1902，p. 53），「第二部」の技（十節）を行うものである。

そこで第一部の技についてしてみると、胴技に関連する項目は、第二十三節において、「右胴打込（踏込）精眼の構」（静岡県師範学校、1902, p. 32）が以下のように解説されている。

- (一)「エイ」
- | | | |
|---|----|----------------------------|
| { | 両臂 | 剣を左肩に取り右腕に打込む〔図7参照——引用者注〕, |
| | 体 | 十分沈めて前にかゝる |
| | 左足 | 力を入れ前に踏出し膝を屈く, |
| | 右足 | 伸し趾端にて立つ心, |
- (二)構に復る, (左足僅に退く
初めの位置へは復さぬ)
- (静岡県師範学校, 1902, p. 32)

つづく、第二十四節の「左胴打込（踏込）精眼の構」（静岡県師範学校，1902，p. 33）は，以下のように教示されている。

- (一)「エイ」
- | | | |
|---|----|----------------------------|
| { | 両臂 | 剣を右肩に取り左腕に打込む〔図8参照——引用者注〕, |
| | 体 | 十分沈めて前にかゝる |
| | 右足 | 力を入れ僅に踏出す |
| | 左足 | 伸し趾端にて立つ心, |
- (二)構に復る,(右足僅に退く)
- (静岡県師範学校, 1902, p. 33)

このように、第二十三節の「右胴打込（踏込）精眼の構」（静岡県師範学校，1902，p. 32）と、第二十四節の「左胴打込（踏込）精眼の構」（静

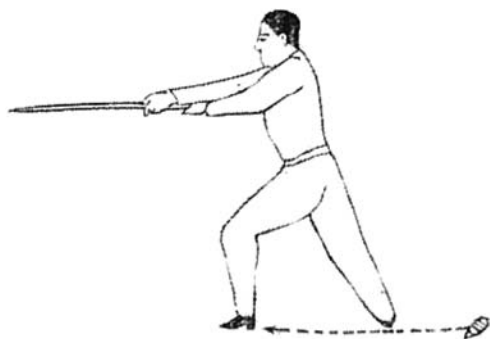


図7 「右胴打込」
(静岡県師範学校, 1902, p. 32.)

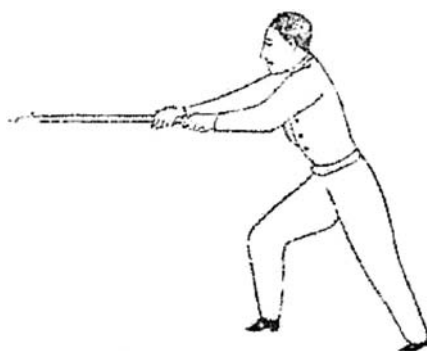


図8 「左胴打込」
(静岡県師範学校, 1902, p. 33.)

岡山師範学校, 1902, p. 33) では, 相手の右胴または左胴へ打ち込む方法が説明されている. なお, これらの胴技では, 図 7 のように相手の右胴へ打ち込む場合は左足を前にして, 図 8 のように相手の左胴へ打ち込む際は右足を前にする「足さばき」が提示されている.

更に、第一部の技では、胴技に関連する項目として、第二十五節において以下に引用する「両胴打込（踏込）精眼の構」（静岡県師範学校，1902，p. 34）が取り上げられているが，ここでも相手の右胴と左胴の両方の胴へ打ち込む方法が教示されている。

- (一)「エイ」 右胴打込に同じ、
 (二) { 左足 退きて右足に着け直立となる、
 { 両臂 剣を右肩に取る、
 (三)「エイ」 左胴打込に同じ、

- (四) { 右足 退きて左足に着け直立となる,
 { 両臂 剣を左肩に取る,
 (静岡県師範学校, 1902, pp. 34-35)

以上のように、中島によって考案された木剣体操における胴技の内容は、右胴及び左胴へ打ち込む方法が提示されていた。中島の木剣体操は「身体の均斉的發育を促」(中島, 1909, p. 5)すことを目的とし考案されたものであったが、胴技に限ってみれば、彼は従前の剣術における「生理上の得失を考慮し、…右技左技を置いて、運動の偏倚を避け」(中島, 1914, p. 38)る措置を講ずること、つまり従来の剣術では否定的な見解が示された左胴打ちを、右胴打ちと同等に位置づけることによって、その目的を達成しようとしたのである。

3-3. 『中等武術教科書 前編』(中山資信・中野篤一郎編, 1906年)にみる胴技

上述した、小沢や中島と同じ立場から武術の体操化を試みた人物として、中野をあげることができる。棚田(1982)によれば、中野は、1870年6月10日中野量平の長男として中川原村に生まれた。その後、1882年に「郁文小学校の中等全課程を卒業し、家事の農業を手伝いながら、中田塾(志筑町)、養徳学院(生穂町)、積小軒(洲本町)などの塾で学び」、1886年から「山本久助の指導する竹内流武道(大野村)に入門して武術を習得」した。そして1889年に「兵庫県から授業生免許状を受け、厚浜簡易小学校を皮切りに清水、郁文」、1896年に「訓導に昇格して、中川原、釜口、鮎原最後は神戸市中宮の7つの小学校で教職」に就き、1906年には「大日本武徳会の中山資信教士と共著で『中等武術教科書』前編を出版」している。

この『中等武術教科書 前編』では、木刀による武術体操が取り上げられているが、その理論は中野の考えが基礎になったものと推測される(中村, 1980, p. 34)。1903年8月、中野は兵庫県津名郡の鮎原小学校訓導という立場から、『教育時論』誌上に「武術体操(上)」(中野, 1903a, p. 22)、「武術体操(下)」(中野, 1903b, p. 21)と

題し、その概要を解説した論文を2回にわたって連載しているからである。これらの論文のなかで、中野は自身が考案した武術体操について以下のように述べている。

是れ迄の武芸鍛錬の方法は簡人的で身体不均衡の発達をなしつゝあつた故に、是を此の仮に用ひたらんには、到底多数全般に普及せしむること、頗る困難の事なり、如何んせば完全に体育的方法にも適し、且つ其の教授者も、アマリ修錬に長時間を費さずして教授し得よ一かと、爰に拱手思慮すること、殆と三ヶ年余、苦心慘担の結果その方法を断定せり、曰く純粹の武芸は、敵を受けてよく之を防ぎ、身を完うするが主たるの目的であつて、身心鍛錬は副式的目的なり、今要求する所は、身心鍛錬が主であつて、敵を防ぐと云ふよ一な事は、副式的目的なり、故に体操的に組立てねばならぬと、茲に於て諸流の粹を選び精を抜き以て彼是相配合して、而も順序正しく、最も体育的方法に適ふ様に之を組織し、易より難に進み、簡より繁に入り、不知不識の間に、其の武芸を習得せしめ、他日一気発動よく之を応用すれば、万人の敵も防ぐ可く、千騎の仇も追ふ可く、真の武芸に達しつゝありながら、顧て其のなす所の技は、四肢五体を最も均斉に運動せしめて、少しも労とせず、厭はず、互いに遊戲をなしつゝあるが如く、欣然、奮然、体育を修錬するよ一に、薙刀に於ても、棒に於ても、将た又木剣、懐剣、鉄扇、に於ても、各順序よく組立てり、之を総称して武術体操と云ふ、…(中野, 1903a, pp. 23-24)

次いで中野は、武術体操の方法とその効用について、以下のように述べている。

薙刀、棒、木剣、懐剣、鉄扇、何れも一人の教師が六七十人を一斉に教授し得る事は丁度普通体操と異らない、矢張り最初は一行、或は二列、等に整列せしめ、番号を唱へしめ、後四列、或は六列とか、八列とか、体操の種類や人

数の多少によりて、相違はあるが、兎に角適宜の間隔を取つて、其の位置を得しめ、教師の号令によりて運動則ち武術体操を演ずるのである、…〔この武術体操を——引用者注〕やつて居れば、どの動作でも身体各部に亘りて運動して居るから、つまり不偏、均斉に發育せしむる事が出来るのである…この武術体操は身体各部を均斉に發育せしむると、同時に四肢五体の働作を機敏に働かせ、随て全身の健康を保護増進することが出来る、又無形的に於て精神を快活に而も剛毅ならしめ、諸事厳格に規律を守り、協同事に従ふ習慣を養ふ事が出来る、…（中野，1903b, pp. 21-22）

つまり、中野が考案した武術体操は、「身体各部を均斉に發育せしむると、同時に四肢五体の働作を機敏に働かせ、随て全身の健康を保護増進すること」（中野，1903b, p. 22）を第一の目的とし、この目的を達成するためにも、「箇人的で身体不均衡の発達をなしつゝあつた」従前の剣術の指導法を廃し、新たに「諸流の粹を選び精を抜き以て彼是相配合」し、且つ「体育的方法に適ふ様に之を組織」（中野，1903a, p. 24）し、加えて「一人の教師が六七十人を一斉に教授し得る事」（中野，1903b, p. 21）が出来るように一斉指導法を採用することを提唱したのであった。

さて、このような視点に基づき創案された中野の武術体操の具体的な技は、中山資信（以下「中山」と略す）・中野編（1906）の『中等武術教科書 前編』において、「実演」（二十一節）として掲載されている。この実演は、「櫓の木にて刀の形に造」った「木刀」（中山・中野編，1906, p. 2）の鍔元を右手で、柄頭を左手で握りながら行われるもので、とりわけ胴技に関連する具体的な演習項目は第十四節の「正眼より右（左）胴撃」（中山・中野編，1906, p. 45）において、次のように解説されている。

用意，正眼構（右自然体）

一、左足を進め刀を左肩にとり斜に相手の右胴を撃つ〔図9参照——引用者注〕、

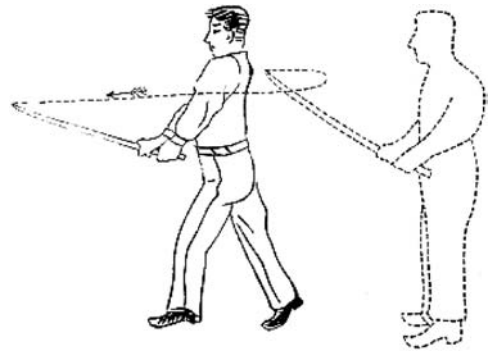


図9 「左足を進め刀を左肩にとり斜に相手の右胴を撃つ」

（中山・中野編，1906, p. 46.）

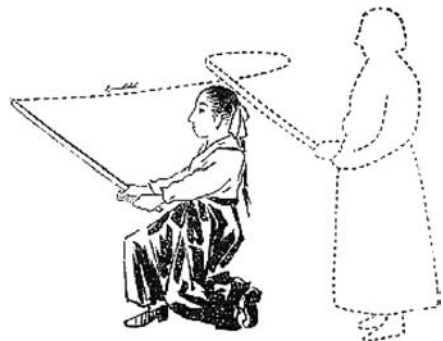


図10 「右足進め左折膝にて左胴を撃つ」

（中山・中野編，1906, p. 49.）

（胴撃には両前膊を交叉し両臂を伸して撃つ）全く左自然体となるべし、

二、左足を旧位に復すと同時に正眼構となるべし、

三、右足を進め相手の左胴を撃つ、要領前に同じ、

四、右足退け旧位に復す刀を正眼構にとり、以上連続して行ふべし 止めの令にて納剣す、（中山・中野編，1906, pp. 45-46）

ここでは、相手の右胴及び左胴を打つ方法と、右胴を打つ場合は左足から（図9参照）、左胴を打つ場合は右足から進む方法が解説されているのである。

同様の内容は第十六節の「折敷にて胴撃」（中山・中野編，1906, p. 48）においても確認する

ことができ、以下に引用するように、右折膝によって右胴を打つ方法と、左折膝によって左胴を打つ方法（図10参照）が解説されている。

用意，正眼（自然体）

一，左足進め立膝となり右屈膝を地につくと同時に相手の右胴を撃つ（右折膝）

二，起立すると同時に左足を退け右足に引きつくと同時に刀を正眼に構ふ，

三，右足進め左折膝にて左胴を撃つ〔図10参照——引用者注〕，

四，起立すると同時に右足を左足に引き着け刀を正眼に構ふ

以上連続して行ふべし 止めの令にて納剣す，（中山・中野編，1906，pp. 48-49）

なお中野は翌年，中山と共に編で，この木刀による武術体操と棒術及び薙刀に関する武術体操とを載せた『日本武術教範』を発刊しているが，同書では，武術体操は「体育に適するもの」（中山・中野編，1907，凡例 p. 1）でなければならないため，「凡て技は…左右交互を数回行ひ決して右或は左に偏して行ふべからず」（中山・中野編，1907，凡例 p. 3）と言及している。

以上のことから，中野によって考案された木刀による武術体操の胴技は，従前の剣術界では否定的な見解が示されていた左胴打ちを，右胴打ちと同等に位置づけ，「体育的方法に適ふ」（中野，1903a，p. 24）内容，すなわち身体の左右の平等的発育を促す内容を提唱したものであったといわねばならない。

4. 結 び

本研究は，武術体操法が登場する以前の近代日本において，1対1で伝承されていた剣術の胴技の内容を当該期の代表的な剣術書を通して分析し，それが1890年代後半から1900年代にかけて，学校体育に剣術を正課教材として採用させることを念頭に置いて試みられた，小沢，中島，中野らの教育者による武術体操法ではどのような胴

技として提唱されていたのかについて検討することを通して，剣術の指導法が1対1の個別指導から体操式の一斉指導へと転化されていくなかで，剣術の胴技がどのようにして医学的合理主義に立脚した体育観に基づくもの，すなわち身体の平等的発育を促すものへと改変されていったのかについて解明することを目的としていた。本論で検討した結果を踏まえ，本研究の結論を述べたい。

1. 1884年から1897年までにおける代表的な剣術書における胴技の内容は，左胴右胴のうち右胴のみを打つことを目的として解説されていた。このように右胴を優位とした理由は，市川（1895）や米岡（1897）が説く右胴の打ち方からも明らかのように，それが術理に適う技であること，すなわち急所としての肝臓を切る武術性に拘っていたことによる。

2. 1890年代後半から1900年代にかけて，武術（剣術）を学校体育の正課教材として組み入れるべく，小沢，中島，中野らの教育者は武術体操法を考案した。これは剣術の指導法を，1対1の個人指導から体操式の一斉指導へと転化させる契機となった。同時に，その胴技においては右胴と左胴の両方の胴を打つ内容が提示されるようになった（小沢，1897；静岡県師範学校，1902；中山・中野編，1906）。

3. つまるところ，小沢らが試みた武術体操法の胴技では，従前の剣術界が否定的に捉えていた左胴打ちが右胴打ちと同等に位置づけられ，身体における左右の平均的発育が狙われることとなった。医学的合理主義に立脚した体育観に基づく胴技が提唱されるようになったのである。

注

注1）高野（1915）によれば，体操伝習所の調査結果は1890年7月の『『本邦学校体操科施設沿革略』の中，『武技科の景況』といへる一節中』（高野，1915，p. 289）において，以下に引用するように説明されていたという。

二術〔剣術と柔術——引用者注〕の利とする方
（一）身体の発育を助く（二）長く体動に堪ふる力量を得しむ（三）精神を壮快にし志気を作興す（四）柔惰の風態を去りて剛壯の姿格を収めしむ

(五) 不虞の危難に際して護身の基を得しむ。害若くは不便とする方 (一) 身体の發育往々平等均一を失はん (二) 実修の際多少の危険あり (三) 身体の運動適度を得しむること難く強壯者脆弱者共に過劇に失し易し (四) 精神激し易く輒もすれば粗暴の氣風を養ふべく (五) 争闘の念志を盛にし徒らに勝を制せんと風の成しやすし (六) 競進に似て却て非なる勝負の心を養ひがちなり (七) 演習上每人に監督を要し一級全体一斉に授けがたし (八) 教場の坪数を要すること甚大なり (九) 柔術の演習は単に稽古着を要するのみなれども剣術は更に稽古道具を要し且常に其衣類及道具を清潔に保つこと生徒の業には容易ならず。

右等の事実を得て伝習所に於ては之れを教育上の理論に照らし断定を下せしこと左の如し

(一) 学校体育の正科として採用することは不適當なり (二) 慣習上行はれ易き所あるを以て彼の正科の体操を怠り専ら心育にのみ偏するが如き所に之れを施さば其利を収むることを得べし (高野, 1915, pp. 290-291)

注2) なお扱う史料については、旧字体を新字体に改めた。

文 献

- 市川宜堅 (1895) 剣法独案内. 柏原政次郎: 大阪.
- 飯塚伝太郎編 (1974) 静岡の人びと. 静岡市教育委員会: 静岡, p. 157.
- 今村嘉雄 (1951) 日本体育史. 金子書房: 東京, p. 137.
- 井ノ口松之助 (1887) 柔術剣棒図解秘訣. 魁真楼: 東京, p. 94.
- 石井隆憲 (1987) 小沢卯之助と剣道教授法. 尚美学園短期大学研究紀要, 1: 108.
- 石井隆憲・阿部忍 (1984) 武術体操に関する研究—刀体操を中心として—. 武道学研究, 16(1): 22.
- 龜山大城 (1895) 撃剣ト柔術図解. 大成堂: 名古屋, p. 32.
- 岸野雄三・竹之下休蔵 (1983) 近代日本学校体育史. 日本図書センター: 東京, p. 64.
- 文部省 (1883). 文部省第十一年報. 文部省: 東京, p. 28.
- 中島賢三 (1909) 木剣体操法 (第3版). 自刊: 静岡.
- 中島賢三 (1914) 木剣体操法 (第4版). 自刊: 静岡.
- 中島賢三 (1918) 木剣及長刀体操法. 目黒書店: 東京.
- 中村民雄 (1976) 明治期における武術体操法について (一). 武道学研究, 9(2): 61.
- 中村民雄 (1978) 明治期における武術体操法について

- (その三). 武道学研究, 11(2): 93-94.
- 中村民雄 (1980) 近代武道教授法の確立過程に関する研究 (一). 武道学研究, 13(1): 30-37.
- 中村民雄 (1981) 近代武道教授法の確立過程に関する研究 (三) —文部省主催武術講習会について—. 武道学研究, 14(1): 13-14.
- 中村民雄 (1987) 武術体操法—教材化の試み—. 剣道時代, 14(6): 62-66.
- 中村民雄 (1994) 五, 武術体操法. 中村民雄, 剣道事典—技術と文化の歴史—. 島津書房: 東京.
- 中村民雄 (2007) 今, なぜ武道か. 日本武道館: 東京.
- 中野篤一郎 (1903a) 武術体操 (上). 教育時論, 659.
- 中野篤一郎 (1903b) 武術体操 (下). 教育時論, 660.
- 中山資信・中野篤一郎編 (1906) 中等武術教科書 前編. 細川書店: 東京.
- 中山資信・中野篤一郎編 (1907) 日本武術教範. 不明.
- 根岸信五郎 (1884) 撃剣指南. 自刊: 東京.
- 大場一義 (1982) 小沢卯之助著『武道改良教授式武術体操論』(明治二十九年) 四六判. 大場一義編, 近代体育文献集成 第I期 別冊解説編. 日本図書センター: 東京, pp. 59-60.
- 大蔵省印刷局編 (1911a) 文部省令第二十六號. 官報, 8432: 671.
- 大蔵省印刷局編 (1911b) 文部省告示第二百三十五號. 官報, 8489: 82.
- 小沢卯之助 (1896a) 武道改良教授武術体操論. 小林千鶴堂: 東京.
- 小沢卯之助 (1896b) 非撃剣可撃剣両者に望む. 教育時論, 420: 10.
- 小沢卯之助 (1897) 武術体操法. 大日本図書: 東京.
- 静岡県師範学校 (1902) 木剣体操法. 静岡県師範学校: 静岡.
- 高野佐三郎 (1915) 剣道. 剣道発行所: 東京.
- 棚田眞輔 (1982) 中野篤一郎の遊戯と武術教育—特に薙刀体操における業績について—. 研究資料, 47: 3.
- 渡辺一郎編 (1971) 史料明治武道史. 新人物往来社: 東京, p. 13.
- 横野鎮次 (1894) 秘訣図解柔術撃剣独習法. 矢嶋誠進堂: 大阪, p. 15.
- 米岡 稔 (1897) 撃剣柔術指南. 東京図書出版: 東京.
- 湯浅 晃 (2002) 近代剣道の幕開け—千葉周作剣術論の公開—. 月刊剣窓, 254: 38.

(平成25年11月27日受付)
(平成26年8月8日受理)